

JICA 中国事務所ニュース

(2007年8月号)

1. 最近のトピック

例年夏はいろいろな広報関係のミッションが中国を訪れますが、今年は、「JICA中学生・高校生エッセイコンテスト2006」研修旅行、「ODA民間モニター」、ODA広報番組「地球サポーター」取材の3件がほぼ同時期にやってきましたので、その結果をそれぞれご報告します！

(1)「JICA中学生・高校生エッセイコンテスト2006」研修旅行で、7名が来訪！

7月25日(水)～7月31日(火)の日程で、昨年度の「JICA中学生・高校生エッセイコンテスト2006」で審査員特別賞を受賞した7名の皆さんが中国を訪れ、技術協力プロジェクトを見学し、協力隊員が活動している現場を訪問しました。みなさんの投稿から高校生たちの視察状況を見てみましょう。



交流タイム

「先生、時間が短いです。」

日本人学生との別れの直前、一人の中国人女子学生が私にこっそりと言ってきました。彼女のこの一言が短い2日間のすべてを物語っているように私は感じました。

去る7月27・28日、JICAエッセイコンテストで入賞した日本人学生が私の配属先である長春市11高校に来ました。下は中学2年生の男の子、上は大学1年生の女の子、計7人。みな中国に来るのは初めてという学生です。その彼らのはるばる長春までやってきて、配属先の中国人学生との交流会、学生宅へのホームステイという短いながら濃い時間をこちらの学生と共に過ごしていきました。

27日はまず学校で中国の学生約50人と共に交流会を行いました。7、8人の少人数グループに分かれての日本

人学生とのおしゃべりタイム。歌、ダンス、琴、サックス演奏など、出し物の発表。交流会はこの2部構成で、2時間半ほど行いました。

私以外の日本人とほとんど話をしたことがない学生たち。日本語が得意でない学生も多くいます。「みんな、大丈夫だろうか・・・」交流会が始まる前はそんな心配、不安ばかりが私の中にはありました。しかし、始めてみるとこれら心配、不安は杞憂でした。心配していたことすらも忘れてしまったぐらいです。

確かに日本語が上手ではないために、言いたいことが伝わらない。日本人学生の言っていることが理解できない。そんな場面は学生たちには幾度も幾度もあったようです。しかし、身振り手振り、顔の表情、筆談と使えるものは何でも使って伝えようという一生懸命さ。みんなでお互いの欠点を補い合って理解しようという協力体勢。そんな学生たちの懸命さが自然と日本人学生の緊張をとき、なごやかな雰囲気でおしゃべりが弾んでいました。また、話すのは苦手でも、ダンスや楽器の演奏で楽しんでもらおうと、披露してくれた学生もいます。どれも本当に見ていて微笑ましい光景でした。



全体写真

交流会後はホームステイ。今回、日本人学生にとっても中国人学生にとっても、このホームステイが一番の思い出となったようです。同僚の先生からは「夜は危ないから出歩かないように！」ときつく言われていましたが、学生はそれを忘れて(!?)、夜まで思いっきり楽しんだようでした。カラオケへ行ったり、繁華街で買い物をしたり、長春の観光地を見てまわったり。日本人学生を中国の銭湯へ連れ

て行った学生もいました。次の日、日本人学生も中国人学生も少し疲れの残る顔をしていましたが、それでもみな口をそろえて「楽しかった」と言っていたのが印象的です。

今回の交流は学生の言うとおりに、とても短い時間でした。しかし、体も心も成長段階の彼らにとっては大きな実りのある2日間となったのではないかと思います。別れ際の学生の涙を見ても強く感じました。また、私自身も自分の言いたいことが伝わらないもどかしさ、悔しさを味わいながらも、「交流したい」「伝えたい」という気持ちの強さが、日本語の不自由さをもカバーしていた学生たちを見て、彼らから多くのものを学びました。彼らをとても頼もしいと感じた2日間でした。最後になりますが、今回中国へ来ることに不安を抱えながらもやってきてくれた7人の学生の方々には本当に感謝しています。

(長春市第十一中学 森 明子協力隊員)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆



今回の出張は以前と違い、エッセイコンテスト入賞学生研修旅行に同行ということである。3日間の中でたくさん話をしたいので、事前にエッセイ文書をじっくりと読んだ。生徒たちが「援助」、中国や他の発展途上国のことについてどういう風に考えているか、そして生徒たちの年齢、出身地、学年も事前に承知し、生徒との研修旅行を楽しみにしていた。

今回協力隊員が活動している学校で交流活動を行う予定であるので、協力隊員の活動現場も見かけた。7月27日午前中9時半ごろ、長春国際空港に着き、午後2時森隊員が活動している第十一高校に着いた。森隊員及び当学校の劉校長先生、日本語教師2名、日本語クラスの学生6名が出迎えしてくださった。それから、劉校長先生から第十一高校の歴史及び現状を紹介していただいた。

生徒たちが自己紹介した。エッセイコンテストの生徒たちは慣れない中国語で一息懸命自己紹介をした。第十一高校の生徒さんは上手な日本語で簡単な自己紹介してくれた。

3時ごろから、約50名の日本語クラスの生徒が集まり、懇親会を開いた。司会者から、出し物まですべて日本語だった。歌や踊りが上手でびっくりした。エッセイコンテストの生徒も日本語の歌「ふるさと」を披露した、すばらしかった。そして15分くらい、グループに分かれて生徒たちが日本語で交流をした。皆さんは日本語で話し、わからないときは漢字を通じて交流して、すぐ仲良くなった。

4時半ごろに懇親会が終わって、ホームステイのホストファミリーに向かう。校長先生、教師、森隊員が「安全」について生徒たちに注意した。体調の良くない生徒の食事を特にホストファミリーに気をつけてもらうように頼んだ。「みなさんはどういう一夜になるだろう、中国の家庭生活は慣れるかな」と私はちょっと心配していた。

翌日28日の午前中11時、学校に集合し、心配していた生徒も元気で戻った。女子は全員カラオケにいったそうで、男子は銭湯に行ったみたい。皆さんはお土産をいっぱい頂いたし、おいしい家庭料理もごちそうになった。学校の前で最後の挨拶した時に、生徒たちが泣きながら、抱き合った場面もあった。「また、会える!」、「メールしようね」と第十一高校の生徒と別れた。

28日の午後は長春市内に観光し、ホテル近くのスーパーで買い物をした。29日、午前9時半ごろ北京に戻り、空港で皆さんと別れて、今回の出張を終えた。



誕生日おめでとうございます!

今回、生徒たちが書いたエッセイを読んで、とても感動した。十代の彼らは日本で豊かな安定している生活している中で、世界の発展途中国や、エイズ感染、環境問題をととても注目している。そして、これらも問題に対し、自分

が何かできるか、自分がどうすべきかとちゃんと自分らしく考えている。今井さんが「援助は物を与えるのではなく、教えるである」と書いたことがとても感慨した。そして、皆さんは中国にきて、日本人としてなれないところもいっぱいあった。自動車の交通マナーや、食事の習慣等について、いつも興味しんしんで聞いたり、話したりしていた。27日、唯一の男子長谷川さんの誕生日だった。松島さんがケーキを用意し、私が「福娃」のプレゼントをした。体調の良くない生徒はあまり食事も取れず、ずっと心配していたが、無事に最後まで頑張っていた。

今回の出張で、久しぶりに十代の学生さんと交流し、国際交流、国際援助はきっと彼らが続いてくれると確信ができた。

(中国事務所 馬 理)

(2)「ODA 民間モニター」来訪！

今年度の「ODA 民間モニター」事業による視察団の皆様計 10 名が、7 月 21 日(土)から 28 日(土)までの 8 日間にわたって、中国を訪問し、JICA、JBIC などによる協力の現場視察を行いました。

この「ODA 民間モニター」事業は、平成 11 年度より始まった事業であり、日本の ODA を支えている国民の方々に、ご自身の目で海外の ODA の現場を直接視察していただき、その様子をご意見やご感想として報告いただくことによって、ODA のあり方について提言をいただくものです。平成 18 年度までに計 644 名のモニターの方々に、25 カ国 440 案件を視察していただいております。中国は、平成 15 年度を除き、毎年本モニターを受け入れています。

例年、「ODA 民間モニター」の日程は 1 週間強くらいしかない中で、いろいろなスキームの案件を視察いただく必要があるため、日程は非常に厳しくなりがちなのですが、今年は、前半を貴州省の農村地域、後半を内蒙古自治区アラシャン盟とほぼ中国国内を南から北へ縦断するような日程となり、その日程の厳しさも例年以上となってしまいました。

前半の日程は、ほとんどが 6 時起床 7 時出発、しかも貴州省施へい県の JBIC による円借款対象地域には、省都貴陽市から片道約 6 時間の山道をバスに揺られて 1 泊 2 日で往復するなど、モニターの皆さんにとってはかなりハードな毎日だったことだと思います。

この貴州省施へい県では、草の根無償による小学校の

建設案件と今後、円借款で村の道路や医療施設、各家庭にバイオメタンガストイレが敷設されていく予定の村を視察しました。



村内視察の様子

モニターの皆さん方はこれまで北京などへの旅行の経験がある方もいましたが、中国の農村地域を訪問するのは全員が初めてであり、ブタや鶏などの家畜と人がかなり近い場所に共存している様子を見て、大都市と農村の暮らしの落差に大きな衝撃を受けている方が多いように見受けられました。

また、雨が多く緑の山々が続く貴州から一転して訪れた内蒙古自治区アラシャン盟は一面の砂漠地帯にあり、そこで砂漠化防止に取り組む日本の NGO(草の根無償資金で外務省が支援しているオイスカと草の根技術協力で JICA が支援している「世界の砂漠を緑で包む会」)の活動も、また違ったインパクトがあったようです。



世界の砂漠を緑で包む会による砂漠化防止プロジェクトを視察するモニター一行

アラシャンでは砂漠の真ん中にあるオアシスのほとりのホテルに宿泊しました。夜には砂漠の月明かりを頼りに砂漠に星空観察に出かけた人たちもいましたが、残念ながら月明かりが強く、満天の星空とまではいきませんでした。しかし、砂漠に寝転んで見た星空は、皆さんのいい思

い出になったことと思います。

また、アラシャンでは、青年海外協力隊の名嘉真隊員が美術教師として活動している第二実験小学校も訪問しました。現在夏休みのため、学校に登校していたのは夏季美術講習に参加していた10名ちょっとの児童たちだけでしたが、モニターの中には3名の小・中学校の先生方がいらっしやいましたので、モニターの皆さんは、彼らに日本の折り紙を紹介するべく、毎晩折り紙を練習してきました。

当日は、モニター10名の方が、それぞれ担当することになった、ライオンや熊などの完成品を見せながら、生徒たちに実際の折り方を指導していきました。場所がないため、皆床に直接座っての指導でしたが、参観に来ていた児童達の父兄からは、「生徒たちと同じ目線で指導いただくことは大変素晴らしい！」という声が上がっていました。



折り紙指導の様子

担当の方とも胸をなでおろしています。

(3) 関口知宏さん来涼山了！

ODAの広報番組「関口知宏の地球サポーター」(テレビ東京・毎週金曜日放送)取材陣が7月30日～8月4日の6日間、ここ四川省涼山州を訪れ、四川省造林プロジェクトとJOCVの活動を取材されました。

関口知宏と聞いてピンとこない方もいらっしやるかも。彼はあの“関口宏”の息子さんで、この番組以外でも中国を鉄道で横断する番組に出演されており中国ではちょっとした有名人(?)です。さあ、どんな取材撮影となったか報告したいと思います！

* 徳昌県中医院編(工藤さやか 看護師)

私の任地は四川省涼山州徳昌県という場所にあります。近場にはロケット発射基地で有名な？西昌市がありますが…。徳昌は？というと全く有名でも何でもありません。



中山病院取材の様子

街のあちこちでみかけます。若い方は民族衣装を殆ど着ていませんが、中年以降の年の方は民族衣装に身を包んでいます。しかし、どこを見ても「外国人」の影はありません。時々、あれ？欧米系？と間違えそうになるのは「回族」の方…。

そんな100%中国人の町です。テーブルマナーも中国式なら、食べ物も100%中華(四川料理)街をあるいていると、素敵な腹だしルックのおじ様に出会えます。街角でマージャンや囲碁をしたり、路上で農家の方が直売していたり…。いたって中国ムード100%です。

そんな100%中国ムードの田舎町に7月30日、外国のメディアが入りました！！でも、悲しい事に取材クルーは当然日本人。そう、顔立ちが同じなため周りからはそれほど、ビックリされず…。時々この病院に地元TV局が入ったりしています。知らない方(患者さんとか)は地元TVだと思ったでしょう。

撮影当日。撮影は午後からなので午前中は普通に出勤のはずでした。しかし朝、出勤し、しばらくしてから病



中山病院熱烈大歓迎

棟に電話がなりました。同僚が取り、わたしに伝言「ゴンタン(工藤の中国読み)事務所に来てって」私はとりあえず、言われるままに弁公室へ。そこで、弁公室の人に部屋を

見せろと言われ、部屋へ。そしたら、即、掃除しろと…。え？！昨日掃除したばかりなんですけど？！と思いつつ、それを告げに病棟へ。そしたら同僚に大笑いされました。

床に物が置いてあるのが気に入らなかった様子。でもクローゼットも小さいし置き場がない…。しかたないのでバスタオルなどをかけカムフラージュし、OKができました。

午後になり撮影開始。最初の挨拶の時に徳昌県の役人の方も見えていました。撮影自体は病棟(現在内科小児科勤務)にて行われました。普段の様子と言われても…。同僚はみんな緊張しているし、患者さんは何事か？と様子を伺っているし…。

そしてビックリした事。午前中までいつものようにゴチャゴチャな病棟が、なんじゃ？ここは？！というくらい整理整頓されていました。やれば出来るんじゃない…。と心でポツリと言ったのは言うまでもありません。

撮影で病棟婦長とCPの看護部長が私についてどう思うか？という質問を受けていました。で、二人とも、「前任者の〇〇さんより明るくはないけど…」と同じ答え。ま、前任者がいた場合は仕方のない洗礼なのでしょう。いつも比較級です。



屋上からの風景

はどうしているのかと聞かれ…。殆ど自室ではしてないです…。なので「TVでドラマを見る」と答えました。最後に屋上から徳昌の風景をとり撮影は終了！！

とっても長い1日でした。疲れました。

* 民族中学編(中村直子 日本語教師)

涼山民族中学職業クラスでは8月2日、3日の二日間に渡って取材が行われました。一日目は、通常授業をカウンターパートの李先生と一緒にいき、二日目は第二期生の卒業式でした。当日は番組のナビゲーターを務めて

いる関口知宏さんをお迎えし、日中双方たくさんのご来賓に出席していただきました。学生たちにとってはこのクラスで過ごした1年7ヶ月の思いを胸に、新たな一步を踏み出す大切な日となりました。式が終了してから、関口さんは学生たちに日本語を学んだきっかけや、将来の夢などを一人一人聞かれています。学生たちは学んだ日本語の成果を発揮して、関口さんとの交流に花を咲かせていました。

* 紅十字会編(増田宮子 公衆衛生)

紅十字会でも8月2日、3日の2日間で、1日目は紅十字会での活動、2日目は他医療機関で行った講義の様子を取材していただきました。この2日目に行われた取材先で、サプライズが待ち受けていると誰が予測できたでしょうか！(私はすこし予感していました)。取材先である西昌市中山医院は私が活動上何かとお世話になっている医療機関の一つです。

予め日本の俳優さんが来ることを伝えていたのですが、予想以上の大歓迎振りに私を含め取材陣一同呆気にとられっぱなしでした。関口さんが病院に到着後早速、病院前で紅十字会のボランティア芸術団による歓迎ショー(歌やダンス)が始まり、病院周辺は100人近くの見物人で溢れかえりました。約1時間続いたセレモニーに主旨がややズレてきているのでは？とビクビクしていた私でしたが、無事講義もさせていただくことが出来、ホッとしました。病院スタッフのパワフルな明るさと優しさに関口さんも始終楽しそうにされていました。そしてJOCVの活動だけでなく、資金等、充分とはいえない環境の中で精一杯努力し患者さんのために頑張っているスタッフの姿勢も日本の皆さんに伝わってくれたらと思いました。

* 山の小学校(昭覚県皇崗小学校)編

涼山州派遣JOCVは四川省造林プロジェクト専門家と協力し貧困地域にある小学校通称“山の小学校”で教育普及



山の小学校

活動を行っており、8月4日にその取材が行われました。

小学校は夏休み中でしたが撮影当日、先生方、子ども達に集ってもらい音楽の授業を行いました。関口さんは楽器を使いリズムをとったりして、子ども達の披露する合唱に参加されました。学校での活動取材後は生徒宅を訪問、調度村はジャガイモの収穫真只中だったので、標高3000mのなか鍬を持ち息を切らしながらジャガイモ掘りも体験されました。厳しい環境の中でたくましく元気に暮らしている子ども達に、関口さんをはじめとする取材陣一同元気をもらっていたようでした。

おまけ

テレビ画面でみる関口さんは明るく活発な感じですが実際にお会いしてみると、おっとりとした優しい方という印象を受けました。紅十字会編では沢山の医療スタッフに記念撮影を求められても嫌な顔せず笑顔で始終対応されておりとても気さくな方でした。



乾杯熱唱

(結婚はされているのか？彼女は？などの際どい中国人の質問にも笑顔でさっくり流すところはさすが芸能人です。
*ちなみに関口さんは未婚)

また食事の席では、職業クラス卒業生の晴れの門出に向けて“乾杯”を得意なギターとともに披露されていました。あつというまの撮影期間でしたが、JOCVと現地の人たちが協力し楽しく前向きな姿勢で活動している様子が日本の皆さんに少しでも伝わってくれることを願っています。

* ODA 広報番組「関口知宏の地球サポーター」
<http://www.tv-tokyo.co.jp/chikyu-s/>

2. 主な調査団(派遣中・派遣予定)(8月)

持続的農業技術プロジェクト事前評価調査団
(7.30~8.10)

「中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト」事前調査団 (8.5~8.31)

3. 8月の主要行事

ODA 広報番組「地球サポーター」現地取材(7/26-8/11)
青年研修「中国実務者招聘計画」訪日団(8/31-9/17)

4. 専門家・ボランティアコーナー

今月は、湖南省衡陽市の衡陽第七中学で活動中の小牧陽二郎隊員(日本語教師)からの投稿をご紹介します。

世の中の人間は二種類に分けられる。つまり、辛いものが好きな人とそうでない人だ。

父の好物は「わさび漬け」だ。ところが僕はこれが大嫌い。子どもの頃辛いものが苦手だったのだ。わざわざ辛いものを食べる意味が分からない。美味しくもないのに。

辛いものといえばわが町、衡陽市。華南地域にある湖南省、その省都長沙市から南に200kmほど下がったところにある人口90万の町である。かつては「雁城」と呼ばれた古都も今ではややさびれた感が否めない。とくに名所もなく、中国南方のどこにでもある地方都市である。この衡陽いちばんの自慢が中国八大料理のひとつ、湖南料理。そしてそれは、おそろしく辛い。

赴任した当初、地元の人にご馳走してもらったときによく聞かれた。

「辛いですか？」

とても辛いと答えるとみんな気の毒そうな、それでいてちょっぴりうれしそうな顔をしたものだ。これといった取り柄もない衡陽人にとって、この辛い料理は唯一の誇りなのだ。この町ときたら、夏は気温40℃近く、湿度は80%を超えて汗がしたたり落ちる。冬は雨が一週間に六日は降り、晴天など望むべくもない。路上には声を張り上げる物売り。喧嘩の声。道ばたの消火栓を利用して洗濯する女。ゴミは散乱し、夏場は嫌なにおいが立ち込める。うすぎたない犬が咆えまくる。



衡陽の朝の風景

が、人間が変化する生き物であることだけはつけ足してお

さて。すべての人間は二種類に分けられる。衡陽市が好きな人とそうでない人。僕が前者かどうかは書かないことにする

かなければならない。

そう、大人になった今はけっこう好きなんですよ、わさび漬。 (JOCV 18-1 小牧陽二郎隊員、衡陽第七中学配属)

* 専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所 **沈 曉 静** (shenxiaojing.cn@jica.go.jp) あてにお願いいたします。